

※今回の投稿では、調査研究委員会の活動実態を報告いたします。

## 糖尿病看護の院内外の連携に関する実態調査

—その人らしい療養生活を維持するための糖尿病看護情報提供書作成をめざして—

### 【目的】

糖尿病患者の継続支援のため、施設内および施設間において看護師が行なう情報提供の内容と方法に関する実態調査を行い、その人らしい療養生活を目指した看護情報提供書の在り方を検討する。

### 【方法】

A地域の糖尿病診療科を標榜する病院 63 施設の責任者に調査用紙を郵送し、糖尿病看護に携わる看護師に調査用紙を配布してもらった。調査用紙は施設調査票と個人調査票から構成されており、個人調査票の質問内容は、属性・院内連携・院外連携、継続支援に必要な看護情報などであった。分析は記述統計を行い自由記述欄は類似した内容ごとに整理した。倫理的配慮として、匿名性の保持、自由意思による参加などを文書にて説明し、返信をもって研究協力への同意を得た。研究者が所属する施設の倫理審査委員会の承認を得た。

### 【結果】

施設調査票及び個人調査票の有効回答率は各々37%、38%であった。看護師の所属施設は診療所が約 5 割を占めた。看護師の年齢層は 40 代が多く、糖尿病看護の経験年数は 10~20 年が多かった。糖尿病看護の専門資格を有する者は 6 割を占めた。院内連携の場合が「ある」と回答したものが 7 割、院内の連携では、看護情報提供書は「ない」と回答したものが 7 割近くを占めた。8 割が「連携はうまくいっている」と回答し、その方法は口頭または電話連絡などであった。一方、院外との連携では、看護情報提供は「していない」が 7 割近くを占め、看護情報を提供した経験のない看護師は 4 割を占めた。また、半数の施設が連携は「うまくいっていない」「していない」と回答し、その理由として、「連携に必要な情報の不足」「適切な連携方法が分からない」「体制上の問題」等があげられた。看護情報の提供先は診療所、介護施設が多く、提供手段は看護要約、診療情報提供書が多かった。共通の看護情報提供書の必要性については、6.5 割が「必要」と回答し、理由は「情報を共有し、継続看護につなげられる」等であった。「必要なし」は 2 割を占め、理由は「手間がかかる、既存の方法で補える」であった(表 1)。提供する看護情報項目すべてに 9 割以上が必要と回答した(表 2)。

### 【考察】

看護師は看護情報を提供する機会が少なく、看護の連携の必要性をあまり感じていない可能性があることが推察された。一方、共通の看護情報提供書の必要性を強く認識しているが、体制の未整備や新しいシステムを取り入れることへの負担感などの課題も多いため、より現実に即した有用な連携の在り方が求められている。

表1 共通の看護情報提供書必要性の有無と理由 (自由記述)

必要と回答した理由	必要ないと回答した理由
チームや連携先と共通理解ができる	施設独自のものでよい
必要な情報が得られやすい 継続してケアに繋げることができる	必要な情報があれば共通でなくてよい
共通のものがあればわかりやすく正確である	工夫して現行のものを使用すればよい
書式が一定だと効率的である	共通の枠にとらわれたり、手間がかかる

表2 看護情報提供書に必要な項目の回答比率

